



Title	「鉛」と「お顔」：チベット語敬語語彙形成過程をめぐって
Author(s)	武内，紹人
Citation	内陸アジア言語の研究. 1994, 9, p. 95-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/14828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「鉛」と「お顔」

—— チベット語敬語語彙形成過程をめぐって —— ⁽¹⁾

武内 紹人

はじめに

敬語の存在は日本語の「ユニーク」な特徴であるという議論もかつてはあったようだが、現在では日本語以外のおおくの言語に敬語が存在することが認められている。というより、敬語を、聞き手（相手）と登場人物（動作者など）に対する顧慮・評価を含む表現形式というように広く定義すれば、すべての言語に何ほどかの敬語が存在すると言ってもよい。とはいえ、言語形式としての敬語体系の発達の度合はさまざまだ。

そのなかで、日本語のように敬語表現のための専用かつ体系的な言語形式をもつものを「日本語型」、それ以外を「非日本語型」とよんで分類する学者もいる。⁽²⁾ 初期の敬語研究は「日本語型」敬語についての言語形式の分析を中心とする研究に限られていたが、最近は「非日本語型」敬語における非言語的表現をも含む「敬語行動」についての、社会言語学的視点からの分析が主流になりつつある。⁽³⁾

「日本語型」敬語の研究には、言語形式・用法（行動）とならんで、敬語形式の統辞的な役割にも注目する必要があるだろう。たとえば、動詞・助動詞・終助詞などの述部要素のあらわす敬語的ないし語用論的機能によって動作の主体が明示されていなくてもわかる。そのため主語要素の省略が比較的自由である。専用の敬語表現組織をもつ言語では、敬語形式が文の統辞構造に荷担するぶん、統

(1) 本稿は、『京都教育大学国文学会誌』24号に掲載するため1989年執筆したもので、印刷中としてすでに引用もされているが、同誌の発行が大幅に遅れることになったため、本誌に載せることとなった。

(2) 南不二男『敬語』（岩波書店、1989）pp. 36-37.

(3) たとえば、井出祥子他『日本人とアメリカ人の敬語行動』（南雲堂、1986）。

辞構造の語用論的コンテキストからの独立性が低いと言ってもよい。また、これら⁽⁴⁾の述部要素が文末に位置するのも「日本語型」敬語をもつ言語に共通する特徴である。

さて、チベット語は、朝鮮語、ジャワ語、ヒンディー語とならび「日本語型」敬語の代表といわれる。だが、その具体的なありかたがよく知られているとは言い難い。じっさい、チベット語の研究者のあいだでも、敬語の存在はつとに認識されてはいたが、「形式」、「用法（敬語行動）」、「統辞的役割」のいずれについても包括的な研究がまだない現状である。そこで小論では、もっとも基礎的なトピックである敬語語彙の形成過程をめぐる問題をとりあげたい。

その前にチベット語の敬語形式の特徴を簡単に記しておこう。

1. チベット語の敬語形式

語形態の面からチベット語名詞の敬語形式を分析すると、おおきく3つのタイプに分かれる。

タイプ1（別語彙型）：人体の各部や火などの基礎的語彙では、敬語形式が普通形式とは異なる語幹形式をもつ。⁽⁶⁾

	（普通形）	（敬語形）
（ア）頭	mgo	dbu
（イ）手	lag-pa	phyag
（ウ）口／顔	kha / ngo	zhal
（エ）火	me	zhugs

(4) チベット語の述部の語用論的機能については、武内紹人「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」（『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂、1990：7-17）参照。

(5) パイオニア的研究として、北村甫「チベット語の敬語」（林四郎・南不二男編『敬語講座第八巻：世界の敬語』明治書院、1974：69-93）；Hajime Kitamura, "The Honorifics in Tibetan," (*Acta Asiatica* 29, 1975: 56-74) がある。簡便な解説としては、武内紹人「チベット語の敬語表現」（『月刊言語』1987年7月号、大修館：66-67）を参照。

(6) チベット語形は文語形式（WT = Written Tibetan form）で示す。

タイプ2 (名詞接辞派生型) : タイプ1の名詞の敬語形が、関連した意味分野をもつ名詞に前接して派生型の敬語形をつくる。

	(普通形)	(敬語形)
(ア) 髪	skra	dbu-skra
帽子	zhva	dbu-zhva
(イ) 仕事	las-ka	phyag-las
本	dpe-cha	phyag-dpe
(ウ) 唾	kha-chu	zhal-chu
(エ) 空	gnam	zhugs-gnam
雨	char-pa	zhugs-char

タイプ3 (動詞接辞派生型) : 飲食物などに, gsol-ba「献上する」, mchod-pa「供える」という謙譲の動詞語幹 (mchod-pa は「受け取る, 食べる」の尊敬形でもある) が前接する。

	(普通形)	(敬語形)
(ア) 酒	chang	gsol-chang
(イ) 乳	'o-ma	gsol-'o
(ウ) バター	mar	mchod-mar

タイプ2とタイプ3は、敬語形成辞が名詞か動詞かという相違はあるが、いずれも形態論的手続きによって普通形式語彙から敬語形式がつくりだされる。したがって、語彙体系のうえで両者が二重構造をとっているわけではない。それに対しタイプ1では、普通形式と敬語形式が語彙体系のうえで二層にわかれていいる。さらに、タイプ1の敬語語彙は関連した意味分野をもつ名詞(タイプ2)に対して敬語形成辞としてはたらく点で、類別詞に似た機能をもっている。では、このような敬語語彙層は普通語彙層とどのような関係にあるのか。

各語彙層を比較言語学的にさかのぼると、普通語彙形式に対しては、ビルマ語などの同系 (i. e. チベット・ビルマ系) 諸語のなかに同源形式が見いだせるの

に対し、敬語語彙形式に対しては、それが非常にすくない。言い替えれば、敬語形式のおおくはチベット・ビルマ共通語彙ストックにさかのぼることができず、チベット語内部で歴史的に発展した形式であるらしい。⁽⁷⁾ この考えは現代チベット語諸方言にみえる敬語語彙の分布からも裏づけられる。

たとえば、敬語語彙の発達の度合において、首都ラサやシガツェなど中央部都市地域の方言と他の地方の方言はかなりの落差がある。前者では敬語使用がエスカレートする傾向にあるのに対し、後者では日常レベルでの敬語使用はほとんど見られない。⁽⁸⁾ 両者の語彙体系をくらべると、ラサ方言における敬語語彙形式にあたる語は他の地方方言には存在しないが、普通語彙形式は共通することがおおい。ラサ方言の普通語彙にあたる語が、他の方言では敬語形式として使われていることもある。⁽⁹⁾ つまり、地方では古い語彙形式がよく保存されているのに対し、ラサ・シガツェでは敬語表現がいわばインフレ状態にあり、古い敬語形式が普通形式化し、新しい敬語形式が造り出されてきたといえよう。

では、敬語語彙形式はどのように形成されたのであろうか。

2. 敬語語彙と借用語

一般に敬語語彙形成のソースと見なされるものの一つに借用語がある。たとえば、タイ語では仏教とともに受容されたパーリ語やサンスクリット語からの

-
- (7) 西田龍雄「チベット語語彙体系の考察」(『チベット語史の研究』昭和55-56年度科学研究費補助金[一般A]研究成果報告書[代表者:西田龍雄]1982:2-14)参照。
- (8) チベット人によると、敬語使用はシガツェ出身の貴族のあいだでもっとも顕著だという。
- (9) たとえば南西部のティンリ(Dingri)方言では、ラサ方言や文語で bu「息子、男の子」にあたる語彙はあるが、その敬語形 sras にあたる語彙はない。そして bu はティンリ方言では、ラサ方言や文語の敬称 sku-gzhogs のかわりにも使われる。また、「便所」にあたるラサ方言形式(普通形 sanjöö [WT. gsang-spyod], 敬語形 ^simjöö [WT. gzim-spyod])に対し、ティンリ方言ではラサ方言の普通形にあたる語が敬語表現として使われ、普通表現としては別の語彙形式(demo)をもちいる。武内紹人「チベット語 Thingri 方言について」(『日本西藏学会会報』第25号, 1979:6-10)の§4.2参照。ラサ方言形については、北村甫・長野泰彦『現代チベット語分類辞典』(汲古書院, 1990)参照。

(10)
 借用語が敬語語彙層を形成している。いっぽうチベットでは、同じようにインド仏教文化のつよい影響を受けたにもかかわらず、語彙レベルにおけるインドからの借用語は、タイ語やビルマ語にくらべきわめて少ない。外来語の音形式をそのまま取り入れるよりも翻訳借用する傾向がチベット語にはあるようだ。もっとも現代では、英語、ヒンディー語、中国語からの借用語が急増したが、それらが敬語語彙形成の主材料になっているか否かは定かではない。とはいえ、チベット語の敬語語彙形成に寄与した外来語も少数ながら存在する。モンゴル語からの借用語である。

3. モンゴル語からの借用語彙層⁽¹¹⁾

13世紀に始まるチベットとモンゴルの言語接触の結果としてまずあげられるのは、チベット語仏教語彙のモンゴル語への大規模な借用である。⁽¹²⁾ それに比べモンゴル語からチベット語への借用はきわめて少なく、その分野も仏教とは対照的に社会・政治の分野が中心である。⁽¹³⁾ もっとも多いのは、チベット文語 (WT) tar-han < モンゴル文語 (WM) darqan; (WT) dza-sag < (WM) ĵasay; (WT) the-ci / ta'i-ji < (WM) taiĵi (< 漢語 tai-zu 太子); (WT) hu-thog-tu < (WM) qutuγtu; (WT) er-te-ni < (WM) erdeni; (WT) cho-lo / chol < (WM) čola; (WT) no-mon-han < (WM) nom-un qan などの称号・官職名だが、社会言語学的により興味深いのは、衣服や食べ物などの日常生活に密着した語彙の借用である。3例あげ

(10) 注(7)所掲の西田論文(p.3)参照。

(11) 本章で扱うモンゴル語借用語の用法およびアムド方言形については、Thubten Jigme Norbu and Tsuguhito Takeuchi, "Mongolian Loan-words in Tibetan and their Socio-cultural Implications," (E. Steinkellner ed. *Tibetan History and Language: Studies dedicated to Uray Géza on his seventieth birthday*, Wien, 1991: 383-386) 参照。

(12) George N. Roerich, "Tibetan Loan-words in Mongolian," (*Sino-Indian Studies*, vol. V nos. 3-4, 1957: 174-180) 参照。

(13) チベット語における諸言語からの借用については、Berthold Laufer, "Loan-words in Tibetan," (*T'oung Pao* 17, 1916: 403-552) および George N. Roerich, *Tibetskij jazyk* (Moskva, 1961) pp. 131-135 参照。

⁽¹⁴⁾
よう.

- (ア) (WT) thob-chi / tob-ci 「ボタン」 < (WM) tobči
(イ) (WT) a-col 「タオル」 < (WM) alčiγur ; (MM) alčuur
(ウ) (WT) am-chi / em-ci 「医者」 < (WM) emči

では、これらのモンゴル語からの借用語彙は、本来のチベット語彙とどのような関係にあるのか。おのおの対応する意義分野をもつチベット語彙を示すとつぎのようである。

- (ア) (WT) sgrog-bu / sgrog-gu 「帯, 紐, 縄, 鎖」
(イ) (WT) 'phyi-ras 「布巾」; lag-'phyi 「手拭い」
(ウ) (WT) sman-pa 「医者」

これらは、本来(ア)「結び、つなぐもの」、(イ)「(ものを)拭く布」、(ウ)「薬を扱うもの」という一般的な広い意味領域をもつ語である。それに対し、モンゴル語からの借用語はより特定された意味領域をもつ。(ア)の場合で言えば、本来「結び、つなぐもの」を一般的に指すチベット語彙 sgrog-bu があつたうえに、とくに「ボタン」を指すモンゴル語彙が借用された結果、本来のチベット語彙は「ボタン以外のもの」を指すようになった、という状況が想定できる。(イ)の場合、チベット語彙 'phyi-ras は本来「ものを拭く布」全般を指したが、モンゴル語借用語 a-col が「顔、身体専用」として導入された結果、それ以外のものを指すことになった。いっぽう、ラサ・中央部方言以外の方言、たとえばアムド方言では(地理的にモンゴル語地域と接しているにもかかわらず)モンゴル語からの借用語彙は普及することなく、本来のチベット語彙がもとおりの広い意味領域に用いられている。

こうみると、ラサ・中央部方言では、チベット語本来の語彙体系の中にモンゴル語からの借用語彙が意味領域の分化をともしつづき組み込まれた結果、両

(14) これらはラサ方言を中心とした口語表現なので、綴り表記はゆれがある。

者が意味領域を相補いつつ同一レベルで並存している、とみえるかもしれない。しかし、実は借用語彙と本来のチベット語彙は、社会言語学的価値づけにおいてレベルの異なる二重の層をなしているである。

(ウ)「医者」の例をみよう。本来のチベット語彙 sman-pa は語源的には sman「薬」+ -pa「人」で、「薬を作り、投与する人」だが、チベットの医学ではまさに「薬師 = 医者」に他ならない。その意味で、モンゴル語借用語の am-chi と指示するところは同じで、意味領域の分化はない。いっぽう実際の用法上の違いを見ると、一般に「医者」を指すときには両方とも使われるが、特定の知合いの医者を指したり、医者に直接呼びかける場合には、まず借用語 am-chi を使う。医者自身も am-chi と呼ばれるほうを好む。am-chi の方がより敬意をあらわすことになるといえるだろう。

(ア)「ボタン」の場合にも間接的ながら同じことがいえる。たとえば、thob-chi「ボタン」をつけたモンゴル服 sog-chas と「ボタン」をつけないチベット服 bod-chas を比べると、政府高官たちも非公式の場では前者を好んで着たがるとい⁽¹⁵⁾う。(イ)のばあいも、「タオル」を意味する a-col の方が「布巾」を指す 'phyi-ras より良いイメージを持っているといえよう。

このように、モンゴル語からの借用語彙とチベット語彙をくらべると、前者の方に社会的な優位性 (prestige) が賦与されている。本来のチベット語彙層のうえにモンゴル語借用語彙がより高い社会的価値を持つ層をなしているといっ⁽¹⁶⁾てよい。ただし、この優位性は、借用されたモンゴル語の各々があらわすもの、たとえば「モンゴル医学 (医者)」が「チベット医学 (医者)」よりすぐれていたことに由来するものではない。事態は逆で、より進んだチベット医学の方がモンゴル医学に対しておおきな影響を与えたことはよく知られている。モンゴル語借用語の社会的優位性は、個別的な語彙ごとの問題ではなく、これらのモンゴル語語彙全体が借用されたときの政治・社会的状況の反映なのである。

(15) Tsepon Shakabpa, *Tibet: A Political History* (New Haven, 1967) p. 67 参照。

(16) Christopher I. Beckwith, "Tibetan Science at the court of the Great Khans," (*The Journal of the Tibet Society*, vol. 7, 1987: 5-11) 参照。

モンゴル語語彙の借用は、13世紀から17世紀にかけて断続的におこなわれたと考えられる。当時のチベットとモンゴル(蒙古)の政治・社会的関係は、歴史的に「僧(ラマ)・檀越^{だんおつ}」関係といわれる。すなわち、政治的・軍事的に優位なモンゴルがチベット仏教(の一派)に帰依するとともに檀越^{だんおつ}(patron)として政治・軍事的にバックアップするというものだ。いわば政教分離で、宗教的にはチベット(仏教)が上位だが、政治的にはモンゴルが上位に立つ。この図式は言語接触にも当然反映し、宗教の分野ではチベット仏教語彙がモンゴル語に流れ込み、世俗の分野ではモンゴル語彙がチベット語に借用された。こうして借用されたモンゴル語彙は当然その背景としての政治・社会的優位性を反映することになる。

面白いことに、モンゴル語圏と隣接する東北部アムド方言ではこれらの借用語は定着しなかった。地域住民同士の接触において、チベット語とモンゴル語は民族の違いを示すが、中央における政治・社会的優劣関係を反映しない。したがって語彙の借用は、その指示するものや表現がもともとチベット語側にない、あるいはモンゴル語彙の表すものがチベット語彙よりもとくに優れているというような条件をみたす必要がある。そこではモンゴル語 *em̐ci* 「モンゴル医」がチベット語 *sman-pa* 「チベット医」より権威 (prestige) があるとは感じられないのである。逆に、モンゴルから地理的にはなれた西チベット(ラダック、ラフル⁽¹⁷⁾)の方言では、これらの借用語が中央から一部浸透している。

これらのことは、モンゴル語からの借用が当時の政治・社会的状況をバックに中央チベットで行なわれたことを示すものだ。そこでは、モンゴル語は政治・社会的権威 (prestige) のシンボルであり、ひとびとはモンゴル語彙を使うことにより、その背景にある政治・社会的権威に自らを同一化 (identify) しようとする。その結果、本来のチベット語語彙層に対し優位 (prestigious) なモンゴル

(17) ラダック、ラフルでは、*a-col* は使われないが、*am-chi*, *thob-chi* は用いられる。ラフル方言で、*am-chi* は「チベット医」を意味し、「西洋ないしインド医学の医者」をあらわす英語からの借用語 *doctor* と対比される。筆者の現地調査 (1988, 1991) による。

語借用語彙層が形成されたのである。借用語彙層の導入による意味領域の分化はその結果にすぎない。

このようにして本来のチベット語彙層に重なったモンゴル語借用語彙層は、広い意味での敬語語彙層の一部をなすと言えるだろう。

4. 「鉛」zha と「お顔」zhal

敬語語彙の中には、語源が比較的透明なものもある。たとえば、「便所」のていねい(美化)語である gsang-spyod は、gsang-ba「秘かな」+ spyod-pa「行為」という複合語に分析できる。しかし、おおくの敬語語彙、とくに第1節でタイプ1としてあげたものは、その語源が不明である。おのおのについて個別に考察する必要があるかもしれない。ここでは、その中の一つである「顔、口」の敬語形 zhal の語源について一つの仮説をたててみたい。

12世紀以降のチベット文語においては、zhal のつづりは一貫しており、複合語においても、zhal-snga-nas「ご面前で、御前に」のように用いられる。ところが、最古期のチベット語文献である8-10世紀の敦煌・トルキスタン出土文献中の手紙文書に頻出するおなじ表現を見ると、今度はつねに zha-snga-nas というように zhal の末子音 -l が⁽¹⁸⁾ない形で現れる。このことは、zhal に対して zha という変異形式 (variant form) がかつて存在し、しかも時代的に zha の方が古いという事態を示唆しているように見える。⁽¹⁹⁾しかし zha > zhal という変化は考えにくい。

では、zha にはどんな意味があるのか。zha は単独では語として用いられず、zha-nye「鉛」、zha-rdo「鉛などの鉱石」、zha-la「石膏、粘土、壁土」というような2音節語中にあらわれる。これらの語から zha を鉛、石膏などの鉱物に関連し

(18) 武内紹人「敦煌・トルキスタン出土チベット語手紙文書の研究序説」(山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社、1986: 563-602) 参照。ただし、単独では zhal という形も古チベット語文献中にあらわれる (e.g. Pelliot tibétain 1287: 404-406)。

(19) *zhal-snga → zha-snga のように、同じ調音点をもつ -l と s- が衝突して片方がおちた (i.e. dissimilation in terms of point of articulation) という可能性も考えられるが、チベット語音韻論では、そのばあい後の子音 (つまり s-) が落ちるはずである。

た意味をもつ形態素として取り出すことは可能であろう。ところで、このうちの zha-la に対し、格西曲札やイエシュケの辞書は zhal-ba と等置している。すなわち zha-la = zhal-ba。チベット語の形態音韻論からみると、zha-la > zhal という音節短縮はきわめて自然な変化である。

いっぽうで zha-la > zhal という形態上の変化が想定されたとして、これが「顔」の敬語である zha ~ zhal とどう結びつくのであろうか。意味の上からつながりを探ってみよう。

zha-la = zhal は、鉛などの鉱物を粉状にしたものだが、白色の顔料としても使われたらしい。『藏漢大辞典』は、zha-rdo にも「鉛鉱石、陶器のうわぐすりの原料」と釈している。陶器の白いうわぐすりとして使われた zha-la = zhal は、形容詞「白」dkar と合成して、zhal-dkar「(うわぐすりを塗った) 椀、皿」を指すことになった。さらに複合語では mchod-zhal「お椀」のように zhal のみで「椀」の意味を担うようになった。

ところで、鉛鉱石からとった顔料は顔に塗るおしろいとしても使われる。古代チベットで粘土・赤土を顔に塗る風習があったことはよく知られている。おしろいの使用についての記録はみあたらないが、粘土や顔料を使って化粧する習慣があったと考えられる。そこで、もし顔料を顔に塗ることが高貴な人に限られるとすれば、zha-la = zhal が(顔料を塗った光沢のある陶器と同様に) 顔料を塗った美しく高貴な顔すなわち「お顔」を指すようになったとしても不思議ではない、というのがわたしの憶測をまじえた仮説である。

もう一度まとめよう。「鉛鉱石(zha-rdo)から作った顔料」をあらわした zha-la は、それを塗った「陶器」や「お顔」をも意味するようになった。古チベット語手紙文書にあらわれる zha-snga という形は、チベット語における複合語形成の規則により、その第1音節をとって作られたものだ。いっぽう2音節語であった zha-la に対し、1音節に短縮化した変異形 zhal が並存するようになり、後者が次第に優勢になった。そして定着したのがチベット文語の敬語形 zhal である。zhal-snga という後期の文語形式は、そこから語源的解釈によって新しく作り直されたものであろう。